

アイヌ語の人称接辞体系の形成について

板橋, 義三
九州大学大学院芸術工学研究院音響部門

<https://doi.org/10.15017/2794908>

出版情報 : 芸術工学研究. 3, pp.1-19, 2005-03-02. 九州大学大学院芸術工学研究院
バージョン :
権利関係 :

アイヌ語の人称接辞体系の形成について

On the Formation of the Ainu Personal Affix System

板橋義三

Yoshizo Itabashi

The purpose of this paper is to reconstruct the Pre-Proto-Ainu and the Proto-Ainu personal affix systems on the basis of the modern dialects and the Middle Ainu materials available and then to examine the historical changes of the Ainu personal affix systems. We speculate from the reconstructions that Pre-Proto-Ainu had only a category of the covert person, namely the inseparable 1st & 2nd person, and of the subject and object case affixes of that person, though there was not any morphologically distinct form of the 1st and 2nd person, and that Proto-Ainu developed a new morphologically separate category of 1st and 2nd person and the indefinite person, and personal affixal dichotomies between transitive and intransitive, between subjective and objective cases in the 1st person, between singular and plural only in the 1st person, between inclusive and exclusive only in the 1st person. The category of the indefinite person developed within Pre-Proto-Ainu from the appearance of the category of the 1st and 2nd person and of the singular and plural, though there may have been some influence from contacts of Pre-Proto-Ainu with such Paleo-Asiatic languages as Yukagir, Koryak, Chukchi, and Nivkh.

§0 序論

アイヌ語の人称接辞に関しての研究はこれまであまり進展がなかったが、特にその起源となると徒労に終始した印欧語との比較研究を除いてほとんど皆無であった。それは一つにはアイヌ語そのものに対する関心が低かったことやアイヌ語研究者の数が非常に少なく十分な研究がなされなかったこと、さらに時代を遡るに従って文献が急激に減少し研究そのものが不可能であると思われていたことなどがあると思われる。本稿ではこれまでの比較研究を踏まえた上で、これまで未踏であった人称接辞の祖語以前の形態を再構し、史的变化過程を探る。

本稿でのアイヌ語データの基本的記述は出典を示していることから分かるように、すべてこれまでに著者が資料として構築したものによる。

§1 アイヌ祖語の設定とその意味

まず、祖語という概念は比較言語学上非常に大切な概念であり、系統樹モデルに合致した言語にはその適用が有効であるが、親近なアイヌ語方言間ではその適用が有効であるかどうかの問題となるだろう。つまり、各方言の差異があまりない言語においては内的再構がどの程度有効かということである。

アイヌ祖語の時期についてみてみると、アイヌ祖語は現代の方言資料とこれまで知られている17~19世紀の方言形の一部を基盤にして再構したものであるが、その祖語ははたしてどの程度まで遡れるのかは問題となるであろう。アイヌ祖語の時期は方言間の基礎語彙の共有率によって決まるが、服部の『アイヌ語方言辞典』を見ると、基礎語彙200項目の方言間の共有率は約70%

～90%で、スワデシュの算定式によると分岐後千年の共有率が約 66%なので、アイヌ祖語の時期はせいぜい 5 百年未満というところであり、祖語としては非常に浅く、現代アイヌ語とあまり変らないと言っているであろうと思われる。この点がアイヌ語における比較言語学的方法論を適用する際の限界と言える。

アイヌ語は比較的狭い地域で連続的な分布が見られる諸方言が分岐した後も常に相互に接触を保っていたと見られるので、常時接触による同化作用はだいぶ大きかったと思われる。このような方言間接触によるアイヌ語は系統樹モデルとは異なった発達をしてきたと考えられる。その点からはアイヌ祖語は上に見るように、たかだか 5 百年以前程度の体系しかみることができない。しかしながら、ここではその祖語を基盤に据え類推などの言語変化過程を道具にして、推測という域を出ないかもしれないが、可能な限りアイヌ祖語以前の人称接辞体

系を記述していく。

§2 人称接辞に関する先行研究

金田一京助(1936,1960)は沙流方言と幌別方言を基盤にして、a/an という人称接辞を「雅語の一人称」として口語と異なった人称体系の枠組みを提唱した。知里真志保(1936)も神謡においては人称接辞を独立した体系と考えて口語とは別立てにし、人称体系の枠組みは金田一の考えをほぼ全面的に踏襲し、その枠組みを北海道方言全体にまで拡張した。この金田一・知里説(1936:66-69)の特徴は a/an という人称接辞を雅語の一人称(単数と複数)、口語の一人称複数包括形、口語の二人称敬称(単数と複数)を基本的に表示するものとし、口語の一人称複数包括形の中に、派生的用法として汎称、不定人称、中相、受け身、形容詞形成接辞という機能を認めた。これを表にすると以下のようになる。

(1) アイヌ雅語の人称接辞			I	(2) アイヌ口語の人称接辞		
(a) 他動詞/自動詞主格人称接辞			I	(a) 他動詞/自動詞主格人称接辞		
	単数	複数	I		単数	複数
一人称	a-/an	a-/an	I	一人称	--	a(n)-/an [包括]
	ci-/as ¹⁾	ci-/as ¹⁾	I		ku-	ci-/as [除外]
二人称	e-	eci-	I	二人称	e-	eci-(es/es-) ²⁾
三人称	--	--	I	三人称	--	--{-hci} ³⁾
			I			
(b) 他動詞対格人称接辞			I	(b) 他動詞対格人称接辞		
	単数	複数	I		単数	複数
一人称	i-	i-	I	一人称	--	i- [包括]
	un- ¹⁾	un- ¹⁾	I		en-	un- [除外]
二人称	e-	eci-	I	二人称	e-	eci-(es-) ²⁾
三人称	--	--	I	三人称	--	--{-hci} ³⁾

1) : -as は神謡という口頭文芸では 1 人称として用いられる : -as は神謡集では主格が神であると考えられる時のみ使用してある。

2) : es- は石狩方言 (浅井 1969) のものを挙げる。

3) : -hci はカラフト方言を示した。一人称複数は石狩方言と同じ。一人称複数主格/対格は包括形と除外形の区別がなく an- (他動詞主格)、-an (自動詞主格)、i- (対格) のみが使用される。三人称複数は必ず -hci を使う訳ではなく話し手の主観により使わない場合もある (村崎 1979:49)。

これに対して田村(1971:2-3)は沙流方言を基盤にした異なった人称接辞体系を提示した。a-, -an, i- の接辞そ

のものが人称を表すというより、主語や目的語などの人称に呼応して出てくるものと考え、これらの接辞が

同一形式か同音異義形式かを議論することは無意味であるとした。また、雅語の一人称を認めず、そこでは沙流方言にしか見られない「引用の一人称」という見方を取った。しかし、下記の Refsing の考え方を受け、それまでの同音異義語と考えていた aoka とそれに対応する接辞 a-を「不定人称」として一括し体系的にまとめ直した。また一人称複数包括形などを不定人称の一用法とした(田村 1984:12ff)。

Refsing(1986:218-9)は静内方言において a-の基本的な意味は「ある行為/行動をなす知られざる人」または「人一般」を示すとし、色々な用法の区別は解釈の違いに過ぎず、話者はその区別を意識していないとして、a-を「不定人称」の名の下に一括した。

浅井亨(1982:82)は話者の包含の有無と数への関与の有無という二点から人称体系を分析し、a-を「話者を包含し数には無関与」の人称と位置付け、上記の Refsing と同じように a-の機能を体系的に説明しようとした。

上記の研究は a-をすべて共時的に説明しようとしたのに対し、切替(1983:55-63)は通時的な立場から説明しようとした。アイヌ祖語に「一般人称」というものを再構し、これは各方言の総和的な用法をもつ特定の定まらない人称と定義し、従って、その場面やコンテキストに応じて指示するものが決定されるものとなっている。この一般人称が方言に分化するに従ってそれぞれ特定の意味を派生して行ったが、現代方言でも祖語の一般人称接辞の性質は保持されているとしている(切替 1983:60)。雅語(ユーカラ、カムイ ユーカラ、ウエペケレにおける用法)における a-を「一人称説述体」と認定し、ku/en, e/eci を対話において具体的にそれぞれ一人称と二人称単数/複数を示すものとした。即ち、この接辞を使用することによって、話者自身が話者であること、そして聞き手自身が聞き手であることを強く意識させてしまう機能をもつのである(中川 1987:165)。従って、話者や聞き手は物語りの中に直接参加することはできないので、一般人称の a-を使うことになると説明している。この見解は田村の「引用の一人称」と基本的に軌を一にするが、田村の基盤は沙流方言であり、上述のようにこの「引用の一人称」は沙流方言以外の方言に関しては報告がないので、その他の方言の雅語についての a-に関しては「引用の一人称」とは別に説明する必要が生じる。その点においても切替の祖語における再構した「一人称説述体」は田村の「引用の一人称」の成立過程をも説明し得るものであり、即ち、

切替説は田村説の一般化といえるとしている(中川 1987:165)。

中川(1987:166-7)では人称に関する議論の中で欠落している点として、a-という人称接辞を取った場合、動詞は単複どちらを取るのかということ挙げている。中川の調査によるとカラフト方言も含めほとんどの方言において指示対象が明らかに単数であっても、a-に対しては一般に動詞は複数をとる。例えば沙流方言(雅語も含める)と千歳方言では一人称代名詞が単数形 asinuma であっても、主格接頭辞 a-は単数と複数という動詞の数にかかわらず、その両形と結合するという。それに対し幌別方言では一人称代名詞の単数/複数は共に複数形 aokay を使用するにもかかわらず、主格接頭辞 a-は単数、複数の両方の動詞形につく。また歴史的に沙流方言と千歳方言とは密接な関係があったことが知られており、このような地理的分布からは a-が本来複数の動詞をとり、それが後に単数の動詞をも取るようになったと考えられるとしている。このことは意味的には「不特定 non-specific」から「特定 specific」への変化を想定し、切替の「一般人称」の仮説とも一致すると中川(1987:166)は見ている。が、これは実際には「不特定」から「特定」へ変化したのではなく、「不特定」という意味が消滅した訳ではないので、「不特定」に「特定」が付加され、「特定」の意味領域が拡大したのである。

Shibatani(1990:25-31)では人称接辞の用法はほとんど金田一&知里(1936)と金田一(1960)によっており、その分類方法は切替(1983)、田村(1984)、Refsing(1986)、中川(1987)などの現在のアイヌ言語学の知見が全く参考にされていないため、現代のアイヌ言語学に逆行するような金田一などの信憑性に欠ける古い分類方法を採用している。従って、人称接辞に関しては特にここでは新知見はない。

§3 アイヌ祖語の人称接辞形の再構

3.1 人称代名詞

3.1.1 先行研究に基づいた再構

金田一&知里(1936)と金田一(1960)に基づいて Shibatani(1990:30-1)が作成したものに表記のみを修正したものを挙げる。

(1) 人称代名詞(金田一&知里(1936)と金田一(1960)に基づいたもの)

(a) 雅語			◇	(b) 口語		
	単数	複数	◇	単数	複数	
一人称	asinuma	aoka(y)	◇	一人称 kuani	aoka(y) (包括)	
			◇		cioka(y) (除外)	
二人称	esinuma	ecioka(y)	◇	二人称 eani	ecioka(y)	
			◇	aoka(y) [敬語]	aoka(y) [敬語]	
三人称	sinuma	oka(y)	◇	三人称 ani	oka(y)	

人称代名詞は特別に強調するような場合や「誰?」に対して返答する場合を除いて使われることが少なく、一般には人称接辞が使用される。Shibatani(1990:31)はsinuma「雅語の三人称単数代名詞」の語彙構造を知里(1936:14)の次の考えを基盤にして分析している。

sinuma < siroma < sir「接頭辞:状態を示す」+ oma「V:ある」

知里(1936:14)はsiromaはsinumaのもう一つの三人称単数代名詞形であり、これはその直後の存在動詞 omaが結合することによってr>nの音変化が生じ(この変化はアイヌ語では一般的である)、代名詞が形成されたとしている。これにShibatani(1990:31)は上記のsirの分析をした点が異なり、それを接頭辞「状態を示す」と

みなした。その妥当性はあるが、それを十分に裏付けるものは全くなく、推測の域を脱し得ない。従って、その起源は現時点でも明らかではない。

同様にこの考え方に従えば、一人称と二人称単数代名詞は次のように分析できる。

asinuma < a[一人称接頭辞] + sir + oma

esinuma < e[二人称接頭辞] + sir + oma

また口語の単数形と複数形[雅語と口語は同形]は次のように分析できる(cf. 知里 1936:53;Refsing 1986:92-95;Shibatani 1990:31):

kuan(i) < ku	[一人称接頭辞] + an「ある:単数」 + (i)[名詞化接尾辞]
ean(i) < e	[二人称接頭辞] + an「ある:単数」 + (i)[名詞化接尾辞]
an(i) < φ(ゼロ)	[三人称接頭辞] + an「ある:単数」 + (i)[名詞化接尾辞]
aoka(y) < a	[一人称接頭辞] + oka「ある:複数」 + (i)[名詞化接尾辞]
ecioka(y) < eci	[二人称接頭辞] + oka「ある:複数」 + (i)[名詞化接尾辞]
oka(y) < φ(ゼロ)	[三人称接頭辞] + oka「ある:複数」 + (i)[名詞化接尾辞]

これらの人称代名詞を構成する人称接辞はすべて(一人称と二人称)接頭辞であり、これらの人称代名詞の形成過程から考えると、人称接辞は接頭辞と接尾辞のどちらかからなるが、人称接辞のほとんどが接頭辞であり、接尾辞は後にアイヌ語で二次的に発達したものかまたは他の言語や語族から借用/継承したものか、さらには二次的発達と借用/継承の両者が影響したものか、またさらには存在動詞 an から発達した形式のいずれかであろう。

上記の表内に示した石狩方言や静内方言では動詞の前後の接辞はeci-がanとともに使われる場合、anは接

頭辞(例 an-eci-nukar)としても接尾辞(例 eci-nukar-an)としても可能であり、そのどちらを取るかはその方言による。また上記の人称代名詞語構成から-a(n)は本来接辞ではなく、存在動詞 an に名詞化接尾辞-iがついた形態 ani から名詞化接尾辞-iが脱落した形-an が最終的に不定人称接尾辞になったと見られる。この傍証としては存在動詞-anに対応するもう1つの存在動詞 okay が同様に使われていることから分かる。

上記の1,2人称接頭辞 ku-, e-, en-, un-などからの類推により、この不定人称接尾辞となった-anが不定人称接頭辞 an-としても使用されるに至ったと考えられる。

これに関しては詳しく 1, 2 人称接辞の項で見ていく。

この人称代名詞の分類法の問題点について見ると、人称接辞の項で述べたように、金田一や知里の分類の仕方では雅語と口語を対峙させ、雅語に a-系を一人称として置いている点である。また三人称単数形の sinuma を基本として一人称単数形を asinuma として派生させている点も問題となる。即ち、この分類法は中川(1987:166-7)の指摘のとおり、単数形と複数形の形態を異にし、単数形に sinuma という新しい形態をもつ

方言を基盤にして作られたものである。本来の単数形はその複数形と同形の aoka(y)であったことも考えられる。従って、このような複数形を基盤にする方言も考慮すべきであったと考える。

3.1.2 方言形に基づいた再構

次に文献として保持されている 11 の方言形と中期アイヌ語¹⁾(樺太方言は資料が存在しない)として北海道方言と千島方言をそれぞれ人称ごとにあげる²⁾。

現代方言 ³⁾	単数	複数(除外形)	複数(包括形)
一人称(八雲)	ku'ani	ku'ani 'utar	ci'okay/a'okay
(幌別)	ku'ani	ci'okay	'a'okay
(沙流)	kani	coka	'a'oka
(千歳) ⁴⁾	kani	coka(y)	aoka(y)
(静内) ⁵⁾	kuani	cioka/ciutar (両形)	
(帯広)	ku'ani	ci'utari	ci'okay/'anutari
(美幌)	ku'ani	ci'okay	'anutari
(旭川)	ku'ani	ci'okay	'anokay/'anutar
(名寄)	ku'ani	ci'okay/ci'utari	'anokay/'anutari
(宗谷)	cokay	cokay 'utari	'anokay 'utari
(樺太) ⁶⁾	ku'ani	co'kayahcin/'anoka(y) (両形)	
中期アイヌ語			
(千島) ⁷⁾	koni ^b /kani ^k /ganny ^s	cokay ^b /cogaich ^s /ini ^t /cogay ^v (両形)	
	kani ^t /kani ^v		
(北海道) ⁸⁾	クハンニ(kuani)	?	
[再構形]	*ku-an-i	*ti-oka-i (両形:包括形/除外形の区別なし)	
現代方言	単数	複数	
二人称(八雲)	'e'ani	'eci'okay	
(幌別)	'e'ani	'eci'okay	
(沙流)	'e'ani	'eci'oka	
(千歳) ⁴⁾	'e'ani	'eci'oka(y)	
(静内) ⁵⁾	eani	ecioka/eciutar	
(帯広)	'e'ani	'eci'okay/'eci'utari	
(美幌)	'e'ani	'eci'okay	
(旭川)	'e'ani/'esokay(♀→♂/♂⇔♂)	'esi'utar	
(名寄)	'e'ani	'e'ani'utar	
(宗谷)	'e'ani	'e'ani'utari	
(樺太) ⁶⁾	'e'ani/'eci'oka/'eco'oka	'eci'oka/'eco'oka/'eciokakyahcin	
中期アイヌ語			

(千島) ⁷⁾	an i ^D /ie ^K /eanny(eani);e ^S / ane:aani;e ^T /ie ^V	ecokay;iecokey ^D /ieinkiec ^K / cogaich ^S /ecoka ^T /iecoyay ^V
(北海道) ⁸⁾	ヤニ(eani/yani)	?
[再構形]	*e-an-i	*e-ti-oka-i

現代方言	単数	複数	不定人称(八雲)	単数	複数
三人称(八雲)	*?	?	?	?	?
(幌別)	'an	'okay	(幌別)	aokay	aokay
(沙流)	?	?	(沙流)	?	?
(千歳) ⁴⁾	a(n)	oka(y)	(千歳) ⁴⁾	aoka(y)	aoka(y)
(静内) ⁵⁾	a(n)	a(n)	(静内) ⁵⁾	anoka	anoka
(帯広)	anihi (?)	to'oka(y) utar	(帯広)	?	?
(美幌)	?	?	(美幌)	?	?
(旭川)	?	to'okay	(旭川)	?	?
(名寄)	?	toka utar	(名寄)	?	?
(宗谷)	?'anta 'okay 'utar/ teta'okay 'utar		(宗谷)	?	?
(樺太) ⁶⁾	?' ta'anoka aynu 'utah/ taranoka aynu utah		(樺太) ⁶⁾	' amahci ' amahci	

中期アイヌ語			中期アイヌ語		
(千島) ⁷⁾	?	?	(千島) ⁷⁾	?	?
(北海道) ⁸⁾	資料なし		(北海道) ⁸⁾	資料なし	
[再構形]	*an-i	*oka-i	[再構形]	*a-oka-i	*a-oka-i

- 1): 中期アイヌ語は 17~19 世紀の文献に現れたものをいう。人称接辞や人称代名詞については「松前の言」(1620 年代頃: 金田一 1960:486)に幾つか表記がある。
- 2): すべての方言の人称形は服部四郎、1964「アイヌ方言辞典」岩波書店によるが、沙流方言は田村すず子、「アイヌ語(沙流方言)辞典」草風社で再確認した。
- 3): 本来名詞のみまたは指示代名詞と名詞のみからなる人称代名詞は省いた。
- 4): 千歳方言は中川裕(1995)による。
- 5): 静内方言は Kirsten Refsing(1986)と奥田統己(1999)による。
- 6): 樺太のライチシカ方言、村崎恭子、1979「カラフトアイヌ語」国書刊行会で再確認した。
-amahci は確かに三人称複数形であるが、これは「人は」などの用法をもっているため不定人称用法としたのである(これは樺太方言内の二次的発達であろうと考えられる)。しかし、北海道方言における不定人称接辞は a- であるので、その点では共通しない。従って、樺太方言では北海道方言と共通した不定人称接辞は存在していないといえる。
- 7): 千島アイヌ語は北海道アイヌ語を含め中期アイヌ語方言の三つのうちの一つである。村山七郎、1988「北千島アイヌ語」吉川弘文館も参考として含めたが、この方言は中期アイヌ語の一つとして数える。この方言は:
K:S. Krashennikov(1738)によるもの。
D:M. Dybovskii(1879-83)による収集、I. Radlinski(1912)による出版。
S:Georg Wilhelm Steller(ドイツ人)が 1742 年から 1744 年にかけて千島列島の島々を訪れ千島アイヌ語を収集し

たものを、1774年にドイツで「カムチャツカ地誌」として Johann Benedikt Scheler が出版したもの。その著書に掲載されている千島アイヌ語。[村山 北千島アイヌ語 1988]。

T: 鳥居龍蔵(1903)「千島アイヌ」吉川弘文館によるもの。

V: 著者不明(1843以前) I. Voznesenskii の著作集に収めてあるもので、I. Voznesenskii が極東へ最後の旅行をした1843年以前に編纂されたものなどで、中期アイヌ語千島方言として存在している。

8): 文献としては MA: 松前の言(1620年代頃); M0: 藻汐草(1793年); G: 蝦夷語箋(1855年); H: 蝦夷品彙譯言(1855年); EK: 蝦夷記(1869年)などがある。

?: これはその方言において人称接辞の形態素を含む三人称代名詞があまり使われないかあるいは全く存在しないかの理由で人称代名詞の存在が本稿の著者において現時点で不明であることを示す。

(1) 人称代名詞の再構形とそこから抽出される人称接辞の再構形

上記の 11 の方言形、既知の中期アイヌ語の人称代名

詞形を基盤にして著者が再構したものを以下に整理する。

人称代名詞	単数	複数	人称接辞	単数	複数
一人称	*ku-an-i	*ti-oka-i	一人称	*ku-	*ti-
二人称	*e-an-i	*e-ti-oka-i	二人称	*e-	*e-
三人称	*an-i	*oka-i	三人称	--	--
不定人称	*an-i	*a-oka-i	不定人称	*a(n)-	*a(n)-

これらの代名詞はすべてアイヌ祖語の段階で既に存在していた可能性もなくはないが、これらはさらに分解できる形態素からなり、その中の接頭辞が本来の人称を示しているの、決定的な根拠が今のところ見当たらないが、人称代名詞はすべてアイヌ祖語が形成された後に複合語として形成されたものではないかと考えられる。即ち、アイヌ祖語の時期には人称代名詞は存在していなかったとみてよいであろう。

人称代名詞の単数形と複数形の形態的相違は、その構形成態素の存在動詞の単数形 an と複数形 oka の相違のみであり、人称の相違はその接頭辞の相違に過ぎない。また a-は「不定人称」と考えられ、一人称単数などにその複数形と異なる asinuma を使う方言(沙流、千歳)であっても、ku-や ci-とは機能が異なり、その不定人称 a-が機能している。しかしながら、この不定人称 a-は本来「一般人称を指したもの」とは考えられず、これが何であったのかは下記の人称接辞体系の節で見ることにする。

3.1.3 人称接辞に関連するアイヌ祖語音韻体系の再構過程

(1) 祖語形の再構の手順について

それぞれの方言における音韻対応は単に人称接辞や人称代名詞のみからは再構できない。それはアイヌ祖語の音素をすべて再構することは可能であると考えられるが、本稿では紙面の制約上、人称接辞に直接または間接的に関係する子音と母音に絞って可能な限り関係不可欠と思われる音韻的特徴をもつと見られる領域に踏み込んで再構することとする。

現代方言や中期アイヌ語における、人称接辞に直接関係する子音は/t, c, s, n/の4つ、母音は/i, e, a, u/の4つ(現代アイヌ語では/o/を含めた5母音体系)であるが、アイヌ祖語において関係する子音数はこれより少なかった蓋然性が高いのに対し、母音数は現代アイヌ語と同じ五母音であった蓋然性が高い。ここでは現存する資料に基いて異なる人称接辞や人称代名詞の子音と母音を再構する。

下記に示すように、音韻対応の例として挙げられる語は紙面の関係上、ここでは3~4例のみ挙げているが、実際には他の多くの対応例からも再構形を裏付けていることを断っておく。

音韻対応とそのアイヌ祖語形

現代方言:

八雲	k	t	c/_i	s	n	i	e	a	o ¹⁾	u
幌別	k	t	c/_i	s	n	i	e	a	o	u
沙流	k	t	c/_i	s	n	i	e	a	o	u
千歳	k	t	c/_i	s	n	i	e	a	o	u
静内	k	t	c/_i	s	n	i	e	a	o	u
帯広	k	t	c/_i	s	n	i	e	a	o	u
美幌	k	t	c/_i	s	n	i	e	a	o	u
旭川	k	t	c/_i	s	n	i	e	a	o	u
名寄	k	t	c/_i	s	n	i	e	a	o	u
宗谷	k	t	c/_i	s	n	i	e	a	o	u
樺太	k	t/-h	c/_i	s	n	i	e	a	o	u

中期アイヌ語:

千島	k	t	c/_i	s	n	i	e	a	o	u
北海道	k	t	c/_i	s	n	i	e	a	o	u

再構形	*k	*t	*t	*s	*n	*i	*e	*a	*o	*u
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

1):*/o/は人称接辞の語幹に現れないが、語例として下記に示すので、ここでは故意に挿入した。従って、アイヌ祖語の母音体系は中期アイヌ語と同じ5母音体系であったと考えられる(Vovin [1993:42-64]では8母音以上の体系を提示している)。

上記のようにどの現代方言や中期アイヌ語においても子音、母音ともにそれぞれ対応するので、アイヌ祖語においてもその方言と中期アイヌ語の音素からそのまま再構形としてよいように考えられる。

対応例:

(1) 子音

k/:アイヌ祖語/k/はすべての方言で/k/として表れる

*kamuy 「神」:kamuy(八)、kamuy(幌)、kamuy(沙)、kamuy(千歳)、kamuy(静)、kamuy(帯)、kamuy(美)、kamuy(旭)、kamuy(名)、kamuy(宗)、kamuy(樺)「神」

中期アイヌ語

kamuj(千D)、kam j(千K)、kamui(千T)、kamuj(千V)
「神」

*kem 「血」:kem[-i](八)、kem[-i](幌)、kem[-i](沙)、

kem[-i](千歳)、kem(静)、kem[-i](帯)、kem(美)、kem(旭)、kem(名)、kem[-ehe](宗)、kem[-ihi](樺)
「血」

中期アイヌ語

kiem(千D)、k hm(千S*)、kem(千T)、kiem(千V)
「神」

*makiri 「小刀」:makiri(八)、makiri(幌)、makiri(沙)、makiri(千歳)、makiri(静)、makiri(帯)、makiri(美)、makiri(旭)、makiri(名)、makiri(宗)、makiri(樺)「神」

中期アイヌ語

資料なし

*sik 「目」:sik[-i](八)、sik[-i](幌)、sik[-i](沙)、sik[-i](千歳)、sik[-i](静)、sik[-i](帯)、sik[-i](美)、sik[-i](旭)、sik[-i](名)、sik[-ihi](宗)、

sis[-kihi] (樺)「目」

中期アイヌ語

sik(千 D)、sik(千 K)、sik(千 S)、sik[-i](千 T)、
sik, ar-sik(千 V)「目」

他には *kam「肉」、*kaya「帆」、*keera「味」、*kumi「か
び」、*rakko「ラッコ」、*tek「手」など数多く挙げることが
できるが、これらも再構の際に含めた。

t/: アイヌ祖語の音素には/c/は存在しなかった
と考えられる。それはすべての方言において/c/は基本
的には母音[i]の直前に表れ、[e]を除くその他の母音
[a, o, u]の直前では/t/となり、/c/と/t/は相補的分布を
なしていると考えられるためである。それを直接的に
証明するものは存在しない。アイヌ祖語においては現
代方言の母音[i]の直前の/c/は*/t/として表れたと考
えられ、母音[i]の直前の/c/はその後の内的発展形(口
蓋化)である。具体的には以下のようなものである。

(1) 二人称複数接辞形の形態素 eci-の区切り方
については、理論的には二つしかなく一つは e + ci で
あり、もう一つは ec + i である。しかしながら、現代
方言さらには中期アイヌ語では/-c/で終わる語は存在
しないので、後者の区切り方はアイヌ語には存在しな
いと考えてよい。従って、前者の区切り方しか存在せ
ず、この二人称複数接辞に関しては e + ci であると見
てなんら差し支えがない。さらにそれを意味のレベルか
ら裏付けると、e[二人称単数接辞] + ci[一人称複数接
辞]となり、この場合の ci は複数マーカークと考えら
れるので、eci 全体で[二人称複数]を表すと考えられる。
それに対して ec + i と分析した場合前者の ec の意味が
全く不明となるばかりでなく、後者の i が意味するも
のも全く不明となり、この語全体で[二人称複数]を意
味するという結論を導くことは不可能である。

(2) 現代方言では母音/i/の直前の/t/は口蓋化し
ci となり、ti は存在せず、mat「女性」などの/-t/の語末
子音をもつ名詞の所属形や動詞の名詞化形は-ci(こ
こでは mac i「の女性」)となり、逆に推測すると/c/は母音
/i/の前でのみ起こり本来の音素*/t/を立て得るのであ
る。

また他の母音の場合は次のようになる(cf.
Vovin 1993:12-14)。

(1) 母音[e]の直前に/c/が表れる語は cep「魚」
ceywankep「道具」の二語であるが、前者は八雲と幌別の

方言では ci'ep として表れる(他の方言形は樺太(ceh)
を除いてすべて cep)ので、これは ci[1p. pl] + e「食
べる」+ p「もの」、即ち、「(常食とする)食べ物」と解釈
できる。形態的にも意味的にもこの二方言形が本来のも
のを示していると考えられる。つまり、この語におけ
る/-e-/は/i/+e/の融合による変化した形態を示して
おり、もう一つの語 ceywankep も以下に示すように前
者と全く同様の変化を示すので、/c/は本来母音[e]の
直前には表れなかったと考えてよい。

ceywankep「道具」も沙流と樺太の方言形(それぞれ
ceywankep、ce'e' iwanke orunpe)を除いてすべて
ci'e' iwankep か ci'eywankep となり、また e' iwankep、
eywankep の意味は「使う」という意味なので、「道具」は
従って「ci(私たちが)使うもの」、即ち「道具」という意
味になると考えてよいから、これも本来は[i]という母
音の直前に表れた/t/が口蓋化して/c/になったものと
考えられる。

(2) 母音[a]の直前に/c/が表れる語は cari「(ま
き)散らす」、casi「垣」; icaniw「鱒」、kucan「雌熊」、cotca
「撃つ」、aca「おじ、父」、anca「あざ」、kotca「前」で非常に
少なく、特に語頭にくるものは上記の二語のみであり、
その他の語の場合はすべて/t/となる。母音[a]の直前
の場合でも他の場合と同様*/t/がくると考えられるが、
その直後の母音[a]は後母音なので口蓋化はしないと考
えられる。従って、*/ty/というクラスターを立てる必
要がある。

(3) 母音[o]の直前に/c/が表れる語はたった一つ
cotca「撃つ」であるので、この場合も(2)と同様、*/ty/
を立てる必要がある。

(4) 母音[u]の直前に/c/が表れる語は cup「太陽、
月」と cuk「秋」の二語のみであるので、(2)、(3)と同様に
その他の語の場合はすべて/t/となるので、一般に母音
[u]の直前の場合でも他の場合と同様*/t/がくると考
えられるが、その直後の母音[u]は後母音なので口蓋化は
しないと考えられる。よってこの母音においても*/ty/
というクラスターを立てる必要がある。

*ti「鳥」: cikap[-i]、cir(八)、cikap(幌)、cikap(沙)、
cikap(千歳)、cikap、cir(静)、
cikap(帯)、cikap(美)、cikap(旭)、cikap(名)、
cikap(宗)、chikah[-puhu] (樺)「鳥」

中期アイヌ語

cir、chir(千 D)、cirp(千 S)、chiri(千 T)、「鳥」

*tikir「足、脚」:cikir(八)、cikir[-i](幌)、
cikir[-i](沙)、cikir[-i](千歳)、
cikir[-i](静)、cikir[-i](帯)、cikir[-i](美)、
cikir[-i](旭)、cikir(名)、
kema[-ha](宗)、kema(樺)「足、脚」

中期アイヌ語

資料なし

*haatir「転ぶ」:hacir(幌)、hacir(沙)、hacir(千歳)、
hacir(静)、hacir(帯)、hacir(美)、hacir(旭)、
hacir(名)、hacir(宗)、haaciri(樺)「転ぶ」

中期アイヌ語

資料なし

*kut[-i][帯]:kut[-ci](八)kut[-ci](幌)kut[-ci](
沙)、kut[-ci](千歳)、kut[-ci](静)、
kut[-ci](帯)、kut(美)、kut[-ci](旭)、
kut(名)、kut(宗)、kuh[-cihi](樺)「帯」(概
念形、例えば kut の語末子音-t の代わりに所
属形接尾辞-ci が付き語全体では kuci とな
る)

中期アイヌ語

kut(千D)、k th(千S)、kut(千T)、「帯」

その他に*tis「泣く」、*tip「舟」、*etinke「亀」、*konti「帽
子」などからも*t がたてられる。

以上のようにアイヌ祖語ではそれぞれ*t/_[i]をたてら
れると考える。

*s/:アイヌ祖語*s/はすべての方言で/s/として表
れる

*sar「尾」:sar[-a](八)、sar[-a](幌)、sar[-a](沙)、
sar[-a](千歳)、sar[-a](静)、sar[-a](帯)、
sar[-a](美)、sar[-a](旭)、sar[-a](名)、
sar[-aha](宗)、sarakuh[-pihi](樺)「(動物の)
尻尾」

中期アイヌ語

資料なし

*sine-p「一」:sine-p(八)、sine-p(幌)、sine-p(沙)、
sine-p(千歳)、sine-p(静)、sine-p(帯)、
sine-p(美)、sine-p(旭)、sine-p(名)、sine-p(宗)、

sine-h(樺)「一」

中期アイヌ語

sini-p(千D)、sine-p(千K)、syh-nyh(千S)、
sine(千T)、「一」

*kisar「耳」:kisar[-a](八)、kisar[-a](幌)、
kisar[-a](沙)、kisar[-a](千歳)、
kisar[-a](静)、kisar(帯)、kisar[-a](美)、
kisar(旭)、kisar(名)、kisar(宗)、
kisar(kisar-u-hu[所属形])(樺)「耳」

中期アイヌ語

ksarvasiki(<kisar-vasiki[耳-付け根]「こめか
み」[村山 '71 103])(千D)、ksar<kisar[村山
'71103](千K)「耳」

*us「(靴などを)はく」:us(八)、us(幌)、us(沙)、us(千
歳)、us(静)、us(帯)、us(美)、us(旭)、us(名)、
us(宗)、us(樺)「(靴などを)はく」

中期アイヌ語

資料なし

その他には*sep「広い」、*si-「真の」、*usa「異なった」、
*mos「はえ」、*pis「浜」、*as「立つ」など数多くの例が挙げ
られる。

*n/:アイヌ祖語*n/はすべての方言で/n/として表
れるが、千v では語中において/-nn-/として表れるこ
ともある。

*nii「木」:ni(八)、ni(幌)、ni(沙)、ni(千歳)、
ni(静)ni(帯)、ni(美)、ni(旭)、ni(名)、
ni(宗)、nii(樺)「木」

中期アイヌ語

ni(千D)、ni(千K)、nyh(千S)、ni(千T)、
nij(千V)「木」

*nu「聞く」:nu(八)、nu(幌)、nu(沙)、nu(千歳)、nu(静)、
nu(帯)、nu(美)、nu(旭)、nu(名)、
nu(宗)、nuu(樺)「聞く」

中期アイヌ語

資料なし

*ine-p「四」:ine-p(八)、ine-p(幌)、ine-p(沙)、
ine-p(千歳)、ine-p(静)、ine-p(帯)、

ine-p(美)、ine-p(旭)、ine-p(名)、ine-p(宗)、
ineh(樺)「四」

中期アイヌ語

ini-p(千 D)、ine-p(千 K)、ine-p(千 T)、
ine-p(千 V)「四」

*an「ある、いる」:an(八)、an(幌)、an(沙)、an(千歳)、
an(静)、an(帯)、an(美)、an(旭)、
an(名)、an(宗)、an(樺)「ある、いる」

中期アイヌ語

an(千 T)、an-ua(千 V)「ある、いる、住む」

この他に*nis「空」、*sinrit「先祖」、*anun「他人」、*mun
「草」、*oman「行く」、*pon「小さい」など数多く存在する。

(2) 母音:

/i/:アイヌ祖語/i/はすべての方言で/i/として表
れる。

*iska「盗む」:ikka(八)、ikka(幌)、ikka(沙)、ikka(千
歳)、ikka、iska(静)、ikka(帯)、
iska(美)、ikka(旭)、ikka(名)、ikka(宗)、
iska(樺)「盗む」

中期アイヌ語

iska(千 D)「盗む」、
iska-ruj/iska-sta/iska-gur(千 V)「盗人」

*kina「(有用な)草」:kina(八)、kina(幌)、kina(沙)、
kina(千歳)、kina(静)、kina(帯)、
kina(美)、kina(旭)、kina(名)、hu-kina(宗)、
kina(樺)「(有用な)草」

中期アイヌ語

kina-pet「露」、kina-sut「海草」(千 D)、kina
「笹」、kina-pet「露」(千 T)、kina-sut(千 V)
「茂み」

*ki「する」:ki(八)、ki(幌)、ki(沙)、ki(千歳)、ki(静)、
ki(帯)、ki(美)、ki(旭)、ki(名)、
ki(宗)、kii(樺)「する」

中期アイヌ語

資料なし

この他には*i-aka「見せる、示す」、*i-nu-kar「見る、見え
る」、*kiray「櫛」、*nit「扱う」、*ri「剥ぐ」など多くあるが、

それらも復元の基になっている。

*/e/:現存資料の現代方言も中期アイヌ語も/e/であ
る。

*ee「食べる」:e(八)、e(幌)、e(沙)、e(千歳)、e(静)、
e(帯)、e(美)、e(旭)、e(名)、e(宗)、
ee(樺)「食べる」

中期アイヌ語

e「ついばむ」(千 D)、i-b-e「食べる」(千 T)、
i-b-i「食べる」(千 V)

*kema「足(全体)」:kema[-ha](八)、kema[-ha](幌)、
kema[-ha](沙)、kema(千歳)、kema(静)、
kema(名)、kema kuciki、[-hi](宗)、
kema[-ha](樺)「足(全体)」

中期アイヌ語

kiema(千 D)、kiema(千 K)、k hmma(千 S)、
kema(千 T)、kiem(千 V)

*pe「汁(草木)、水」:pe[-he](八)、pe[-he](幌)、
pe[-he](沙)、pe(千歳)、pe(静)、pe[-he](帯)、
pe(美)、pe[-he](旭)、pe(名)、pe(宗)「足(全
体)」

中期アイヌ語

pie(千 D)、pi(千 K)、p h(千 S)、
peh, pee, pe(千 T)、pie(千 V)

上記の千島方言では/e/が/ie/または/i/となる傾向が
あるが、これはすべて千島方言内での二次的な変化で
あると考えられる。それはその他の方言ではすべて/e/
に対応するからである。この他には*rep「沖」、*tey-ne
「濡らす」、*usey「お湯」、*neto「クルミの木」、*mee「寒い」、
*tise「家」などを基盤に再構した。

/a/:アイヌ祖語/a/はすべての方言、中期アイヌ
語において/a/として表れる。アイヌ祖語において二つ
の低母音(*a₁/と*a₂/)が単なる音声的変異であった
という蓋然性が高いと考えられるが、異なった音素とし
て存在したという疑念の余地がないこともない。事実、
知里(1974:207-209)と Vovin(1993:43-59)において名
詞の語幹の母音とその所属形接尾辞の母音、また自動詞
の語幹の母音とその他動詞化接尾辞の母音の対応から
次のことが言えるとした(Vovin 1993:43-59):

(1)名詞の語幹に/a/が来る場合と自動詞の語幹に/a-//e-//u-/がくる場合、接尾辞の母音は/i/または/u/のどちらかがほぼ同確率で現れる。

(2)名詞と自動詞の語幹に他の母音がくる場合、接尾辞の母音はほぼ常に/i/である。

このことからどうして名詞であっても動詞であっても語幹に/a-//e-//u-/が来る時のみ、その接尾辞の母音が/i/または/u/のどちらかになるのかという素朴な疑問が起こる。それを解消するにはこの語幹の母音を接尾辞の母音の前後の位置に対応して異なった二つの母音*/a₁/と*/a₂/が存在していたと仮定することであるとしている。即ち、/a/は本来二つの異なった音素*/a₁/と*/a₂/であったが、後に次第に音韻レベルでの区別が消失し音声レベルの区別を経て最終的にはその区別も消失したものである。しかしながら、どの方言をとってもこのような/a₁/と/a₂/の異なった音素があったとは見られないことから、これは本来異なった音素だったのではなく、音声レベルにおいて異なっていたと考えられる。この判断が現時点で人称接辞に影響を与えることはないので、ここでは後者を暫定的に採用しておく。

また、上記の(1)に見るように動詞語幹における他の母音/e-//u-/に関しては名詞には現れず動詞にのみ現れるので、それぞれの母音に対して異なった音素を立てる(Vovin 1993:43-51)のには非常に大きな疑問がある。従って、アイヌ祖語には一般に*/e₁/と*/e₂/、*/u₁/と*/u₂/の音韻レベルの区別は存在しなかったと見られる。

*ak「弟」:ak[-i](八)、ak[-i](幌)、ak[-i](沙)、ak[-i](千歳)、ak(静)、ak[-i](帯)、ak[-i](美)、ak[-i](旭)、ak(名)、ak[-ihi](宗)、ahkapo[-ho](樺)「弟」

中期アイヌ語

akipu(千D)、k-aki「私の弟」(千K)、akibo(千T)「弟」

*kam「肉」:kam[-i](八)、kam[-i](幌)、kam[-i](沙)、kam[-i](千歳)、kam[-i](静)、kam[-i](帯)、kam(美)、kam(旭)、kam(名)、kam[-ihi](宗)、kam[-ihi](樺)「弟」

中期アイヌ語

kam(千D)、kam(千K)、k m(千S)、kam(千V)「肉」

*kira「逃げる」:kira(八)、kira(幌)、kira(沙)、kira(千

歳)、kira(静)、kira(帯)、kira(美)、kira'an(旭)、kira(名)、kira(宗)、kira(樺)「逃げる」

中期アイヌ語

kira(千D)、kika「逆う」(千T)「逃げる」

*at「ひも」:at[-u](八)、at(幌)、at[-u](沙)、ak[-u](千歳)、at(静)、atu(帯)、at[-u](美)、atuhu(旭)、atu(名)、num-at(宗)、atuhu(樺)「ひも」

中期アイヌ語

資料なし

*kap「皮」:kap[-u](八)、kap[-u](幌)、kap[-u](沙)、kap[-u](千歳)、kap[-u](静)、kap[-u](帯)、kap「乳房」(美)、kap[-u(hu)](旭)、kap[-u(hu)](名)、kap[-u](宗)、kah[-puhu](樺)「皮」

中期アイヌ語

kap(千D)「皮」

*rar「眉」:rar[-u](八)、rar[-u](幌)、rar[-u](沙)、rar[-u](千歳)、rannuma(〈rar-numa「眉-毛」)(帯)、rannuma(美)、rar[-u](旭)、rar(名)、rar[-uhu](宗)、raru[-hu](樺)「眉」

中期アイヌ語

rar(千D)、rahr(千S)、raru(千T)、vi-rar(千V)「眉」

u/:アイヌ祖語/u/はすべての方言と中期アイヌ語において/u/として表れる。

*ur「毛皮の着物」:ur[-i](八)、ur(幌)、ur[-i](沙)、ur[-i](千歳)、ur(静)、ur(帯)、ur(美)、ur(旭)、ur(名)「毛皮の着物」

中期アイヌ語

ur(千D)、ur(千K)、uru(千T)「着物」

*huci「祖母、おばあさん」:hutci(八)、huci(幌)、huci(沙)、huci(千歳)、huci(静)、huci(帯)、huci(美)、huci(旭)、huci(名)、huci(宗)、ahci[-hi](樺)「祖母、おばあさん」

中期アイヌ語

資料なし

*puu「倉」:pu[-hu](八)、pu(幌)、pu(沙)、pu(千歳)、pu(静)、pu(帯)、pu(美)、pu(旭)、pu(名)、pu(宗)、

puu[-wehe] (樺)「倉」

中期アイヌ語

cf. pu(千D)、pu(千V)「倉」

この他に*pu「穴」、*nupuri「山」、*nuuman「昨日」、*kus「通る、越す」、*yuk「トナカイ」、*tuntu「柱、杭」など数多くを基盤にして再構した。

3.2 アイヌ祖語以前とアイヌ祖語の人称接辞体系

アイヌ祖語における人称接辞体系がどのようなものであったかは現存する資料から内的再構するより方法はないが、そのアイヌ祖語の初期に人称接辞自体が存在

したかどうかも決定するものはない。従って、アイヌ祖語の初期に前提として考えられる可能性は2つある。即ち、(1) 人称接辞が存在した (2) 人称接辞が存在しなかった、という蓋然性である。現存する資料から見る限り、再構できるものは前者の「人称接辞が存在した」であるが、その再構した形式から類推などにより、さらに遡って考えられる可能性がある。その可能性も踏まえて再構する。

まず北海道方言、カラフト方言における口承文芸のジャンルごとに異なる人称接辞 (切替 2002 : 6) を以下に示す。

方言・文体口承文芸のジャンルごとに異なる人称接辞 (切替 2002 : 6)

	1 人称		不定人称	2 人称	
	単数	複数 除外 ; 包括		単数	複数
胆振 : 日常語	ku-/en-	ci-/as/un-; a-/an/i-	a-/an	e-	eci-
沙流 : 日常語	ku-/en-	ci-/as/un-; a-/an/i-	a-/an	e-	eci-
静内 : 日常語	ku-/en-	ci-/as/un-; a~an-/an/i-	a~an-/an	e-	eci-
十勝 : 日常語	ku-/en-	ci-/as/un-; a-/an/i-	a~an-/an	e-	eci-
石狩 : 日常語	ku-/en-	ci-/as/un-; a-/an/i-	an-/an	e-	es-
石狩 : 日常語 (敬語)	ku-/en-	ci-/as/un-; a-/an/i-	an-/an		es-
沙流 : 日常語 (敬語)	ku-/en-	ci-/as/un-; a-/an/i-	a-/an	a-/an/i-	
十勝 : 日常語 (敬語)	ku-/en-	ci-/as/un-; a~an-/an/i-	a~an/-a	a~an-/an/i-	
樺太 ¹ : 日常語	ku-/en-	an-/an/i-	----	e-	eci-
樺太 : 日常語 (敬語)		an-/an/i-	----		eci-
胆振 : 神謡		ci-/as/un-	a-/an	----	
胆振 : 英雄詞曲		a-/an/i-	a-/an	----	
沙流 : 英雄詞曲		a-/an/i-	a-/an	----	
石狩 : 英雄詞曲		an-/an/i-	an-/an	----	
石狩 : 昔話		an-/an/i-	an-/an	----	
胆振 : 神謡 (対話文)		ci-/as/un-; a-/an/i-	a-/an	e-	eci-
胆振 : 英雄詞曲 (対話文)		a-/an/i-	a-/an	e-	eci-
沙流 : 英雄詞曲 (対話文)		a-/an/i-	a-/an	e-	eci-
石狩 : 昔話 (対話文)		an-/an/i-	an-/an	e-	es-
十勝 : 昔話 (対話文)		a~an-/an/i-	a~an-/an	e-	eci-
沙流 : 日常語 (引用文)		an-/an/i-	an-/an	e-	eci-

ci- (1 人称複数除外) /i- (1 人称複数包括) は複合名詞を作るときにのみ現れる : 例 ci-tokpa-pira[subj.-きざむ(pl)-崖]「段々のある崖」(切替 2002 : personal communication)

田村(1984:19)の表より中川(1987:163)が作成したものと上記の切替(2002)の方言表から著者が整理し、それを基にそれぞれの動詞の主格、対格人称接辞の再構し

たものを以下の表に挙げる。その説明に関しては後述する。

[1]アイヌ祖語以前：

アイヌ祖語以前の人称接辞

1, 2 人称 **-an*/**an-*(主格)/**i-*(対格)：暗示的な 1, 2 人称同形の人称範疇と格範疇のみを持つ
(単複、自他動詞、除外包括[1 人称複数のみ]の範疇なし)

[2]アイヌ祖語：

アイヌ祖語の主格人称接辞¹⁾

	単数	複数
一人称	φ (ゼロ)	<i>*ti-</i> [除外] [自他動詞の区別なし]
	<i>*-an</i>	[包括] [自他動詞、単複の区別なし]
二人称	<i>*e-</i>	[自他動詞、単複の区別なし]
不定人称	<i>*-a(n)</i>	[自他動詞、単複の区別なし]

アイヌ祖語の対格人称接辞²⁾

	単数	複数
一人称	<i>*en⁻⁴⁾</i>	<i>*un⁻⁴⁾</i> [自他動詞、除外包括の区別なし]
二人称	<i>*e-</i>	[自他動詞、単複の区別なし]
不定人称	<i>*i⁻⁵⁾</i>	[自他動詞、単複の区別なし]

[3]中期アイヌ語：

中期アイヌ語の主格人称接辞

	単数	複数
一人称	<i>ku-</i>	<i>ci-</i> (他動詞)/ <i>*-as²⁾</i> (自動詞) [除外]
	<i>a(n)-</i> (他動詞)/ <i>-an</i> (自動詞)	[包括] [単複の区別なし]
二人称	<i>e-</i>	<i>eci-</i> [自他動詞の区別なし]
不定人称	<i>a(n)-</i> (他動詞)/ <i>-a(n)</i> (自動詞)	[単複の区別なし]

中期アイヌ語の対格人称接辞³⁾

	単数	複数
一人称	<i>en⁻⁴⁾</i>	<i>un⁻⁴⁾</i> [除外包括の区別なし]
二人称	<i>e-</i>	[単複の区別なし]
不定人称	<i>i⁻⁵⁾</i>	[単複の区別なし]

- 1) : 3 人称の範疇はこの時期だけでなく現在も存在していないと考えられる。
- 2) : *-as*(1 人称複数自動詞補充形)は現代北海道方言と神謡にのみ現れるので、他の方言形からは再構できない。
- 3) : 対格人称接辞は人称代名詞には現れない。
- 4) : 単数形は樺太方言も含め *en-*である。複数形は樺太方言では *i-*を使うが、これは本来の **i-*の機能の二次的発達であろう。他の方言では *un-*で現れる。
- 5) : 樺太方言では *i- hci*を使うが、その他の方言ではすべて *i-*で現れる。

3.2.1 アイヌ祖語以前、アイヌ祖語の人称接辞体系の特徴の概観

アイヌ祖語における人称接辞体系の言語学的枠組みを考えてみる。アイヌ祖語の人称接辞体系から中期アイヌ語のそれへの変化はそれほど大きくないと考えられるが、中期アイヌ語時代の三方言は既に変化しており、特に現代樺太方言と他方言との差からその時代の樺太アイヌ語において早期に分岐があったと考えられる。アイヌ祖語以前の特徴とアイヌ祖語の特徴としては次のことが推測できる。

アイヌ祖語以前の特徴：

- (1) 暗示的な1, 2人称同形の**-an*/**-an-*(主格)/**i-*(対格)の人称範疇と格範疇が存在するのみであり、1人称と2人称が分離しておらず、コンテキストに応じて1人称か2人称かが決定された。
- (2) 単数と複数の範疇がなく、よってその形態的違いもない。
- (3) 自他動詞の範疇がなく、よってその形態的違いもない。
- (4) 主格と対格の2つの異なった範疇がなく、従ってその形態上の違いもない。
- (5) 数の範疇がないので、複数という範疇に入る、除外と包括の2つの異なった範疇がなく、よってその形態上の違いもない。

アイヌ祖語の特徴：

- (1) アイヌ祖語以前には不定人称の範疇は存在しなかったものがその後独立した形態を持たない1, 2人称の形態素から単数と複数の範疇が生じたことで不定人称の範疇が生じた。詳細は次節で述べる。
- (2) アイヌ祖語以前には1, 2人称の形態的範疇はなかったが、コンテキストによって人称を区別し、その後1, 2人称を区別する範疇が生じた。
- (3) アイヌ祖語以前には2人称の主格と対格の範疇がなく、形態的区別は現在もないが、1人称の主格・対格の異なる範疇もなかったが、1人称と2人称の主格と対格の異なる範疇を獲得した。
- (4) アイヌ祖語以前には1人称単数と複数の形態的区別がなかったが、単数に補充形として別の形態素が立った。
- (5) アイヌ祖語以前には1+2人称には無標である包括形のみがあったが、それが不定人称となり1, 2

人称の区別が生じた後、1人称には包括形と除外形の異なる形態が生じた。一人称複数主格の範疇において自動詞では**-as*、他動詞では**ti-*という特殊な除外補充接辞はアイヌ祖語以降に生じた。

以上がアイヌ祖語以前とアイヌ祖語の人称接辞体系の特徴であるが、具体的に一人称から見て行く。

3.2.2 アイヌ祖語における人称接辞各論

3.2.2.1 1人称接辞

一人称単数には方言形と中期アイヌ語形(北海道方言は日本人によって記されたものであるから実際には一ハーの*-h*は存在しないし、本来*-h*があった形跡がないので*kuani*であったと考えられる;実際にローマ字書きでは*-h*がない)からアイヌ祖語として**ku-*を立てて見る。また**ku-*は動詞の種類(自・他動詞)に無関係に使われていることと**a(n)-*は一人称接辞としてすべてユーカラに現れるという特殊な状況を考慮すると、上記のようにアイヌ祖語でも他動詞/自動詞の種類による人称主格接辞の区分はなく、また一人称複数主格除外接辞**-as*も後に導入され、祖語時代からの発達形としての基盤作りを成したと考えることができる。また1人称複数除外形(*ci-*, **-as*)は1人称という共通項があるにもかかわらず、上記の1人称単数形*ku-*とは形態的に共通した部分は全くないことから、それぞれ(**ku-*, **ti-*, **-as*)が補充形であると考えられる。

*ku-*は*a-*とは全く形態的に異なるため、*ku-*または*a-*が一方から他方への(例えば、*a-*から*ku-*が派生したというような)アイヌ語内における二次的発達とは考えられない。これは本来祖語以前から継承したかまたは借用したかのどちらかであろう。そのどちらかということになると、この**ku-*に関して形態上の類似性から見て、近隣の言語または語族から借用したという蓋然性はあるが、例えば、オーストロネシア諸語の1人称単数*ku*と全く同じ意味・形態である。この形態が全くの偶然か借用、または継承したものかは現時点では不明である。従って、暫定的にアイヌ祖語の一人称主格接辞として**ku-*を立てず、ゼロとしておく。

次にほとんどの一人称接頭辞の方言形*ci-*から再構できる祖語形は上述のように、その子音が非口蓋化音(=舌先音)であった**ti-*であろうと考えられる。この閉鎖音/*t/*は前舌高母音の/*i/*の直前では現代日本語のそのように口蓋化する傾向(即ち、/*c/*)にあるので、それ以前では非口蓋化音(舌先音)である**t/*であったと考

える(この点に関しては音韻対応の節を参照)。

一人称対格接辞 en-(単数), un-(複数)について見ると、これらは別個のものと考えられるが、この二つは単数と複数の違いによる形態上の違いであり、共通の語末子音/n/はなんらかの接尾辞であることが考えられるが、多分それは対格を表すものであろう。また樺太方言では i-が対格として数に無関係に使われているが、これはその方言内の二次的発達であろう。従って、アイヌ祖語の一人称対格単数と複数はそれぞれ *en-, *un- となると考えるが、アイヌ祖語以前ではこのような 2 人称接辞 e-などの類推や対格化などによる新しい形態が形成されたと見ることが可能なので、1 人称対格接辞の範疇は存在しなかった蓋然性が高い。

1 人称対格接辞 en-の形成過程については、人称と数の範疇が形成されるとともに、まず 2 人称対格から区別するため、1 人称単数対格の接辞-n を 2 人称対格 e-に付加することで、また数の形態的区別は母音を/e/ から/u/に変えることで 1 人称対格の複数 un-を獲得した。この際の母音/u/の選定は 1 人称単数を表す母音/e/と調音点が最も離れていて、他の品詞範疇と重ならない母音は/u/であるため、その母音を対峙することで単複の形態的区別することができるようになったと考えられるが、これに関しての現段階の十分納得のいく解釈は与えられていない。

3.2.2.2 1+2 人称接辞と不定人称接辞

上表の「方言・文体口承文芸のジャンルごとに異なる人称接辞」では胆振・神謡から十勝・昔話までは 1 人称の数の区別がなく、また 1 人称と 2 人称との対立がなく(「主人公称」ともいわれている)、2 人称の形態素は存在せず 1 人称の形態素だけが存在しており、2 人称は不定人称が用いられる。また 1 人称と不定人称は胆振・神謡を除いて同形であることから、アイヌ祖語の 1 人称(単複)は*a(n)-/*-a(n)であったと考えられる。

一般には時代とともに人称接辞が人称の区別を失うとは考えられず、時代とともに区別が必要である人称接辞が形成されたと考えてよいから、上記の胆振・神謡から十勝・昔話までの 1, 2 人称の区別がないのがより古い形式と考えられる。さらに 1 人称と不定人称が同形態をしていることも偶然ではなく、1 人称からの派生として不定人称が生じたと考えられる。この派生の過程として考えられるのは、日常語はより新しい形式と考えるので、その 1 人称の単数と複数の区別が生じた後の複数

(包括形)の形態と不定人称の形態がほぼ同じ a(n)-/-an であり、この包括形は無標(有標は除外形)であり、より一般的に使用されたものと考えることができ、より古い形式であるといえる。この 1 人称複数包括形は上記の胆振・神謡から十勝・昔話までの 1, 2 人称の区別がない、さらに古い形式と同じである。そのほかの文体をみてもこれらの形態は同じである。即ち、アイヌ祖語の 1 人称(単複)の形態として*a(n)-/*-an を立てることができる。これは前述したように本来接辞ではなく、存在動詞からの名詞化による派生形式であることは述べた。

この存在動詞から 1, 2 人称接辞へそして 1 人称複数包括形へさらに不定人称接辞へと発達するに従って、その場に応じて用いられる形式の「1, 2 人称接辞一般形式」が生じ、それがより一般的な「1 人称複数包括形式」に派生し、さらに「人称にかかわらない不定存在人称」へと意味の変化が生じたと思われる。このように解釈することにより、形態変化的にも意味変化的にも整合するものと考えられる。

さらに傍証として以下のことからアイヌ語においても上記のような同様の移行が起こったであろうと考えられる。本来人称表示に単数・複数の区別を持たない言語では一般に 1 人称、2 人称、3 人称、1+2 人称(話し手と聞き手の包括人称)の 4 つの人称になることが多く、このような人称体系はオーストロネシア系言語(特にインドネシア諸語など)に多く見られる。この数の区別を持たない体系から数の区別を持つ体系に変化する時、本来の 1+2 人称は 1 人称複数包括形式として機能することが一般的であり、換言するば、一般に 1 人称複数包括形式の多くはこのような過程を経て形成されたといってもよいかもしれない。つまり、アイヌ語においてもこのような変遷過程が考えられ、不定人称は数の区別の確立とともに 1+2 人称から 1 人称複数包括形式へと移行し、最終的に不定人称へと派生していったという蓋然性であり、その確率は高いと考える。

ほとんどの方言形(樺太方言は二次的発達であろう)からアイヌ祖語の不定人称対格接辞には*i-を立てることができる。これはアイヌ祖語以前からの継承であると考えられる。この対格形式が主格形式と常に対を成して形成されるのが一般的なため、アイヌ祖語以前の 1, 2 人称においても主格と対格は対をなして形成されていたと考える。また形態的には他のどの人称接辞とも異なり、不定人称主格接辞と不定人称対格接辞は対になって生

じることが一般的なので、アイヌ祖語以前では不定人称の範疇が存在していなかったと考えられるので、アイヌ祖語時代になって初めて主格・対格の範疇が不定人称に存在するようになったと考えられる。またアイヌ祖語の不定人称対格接辞が借用によって形成されたものか、あるいは継承によって形成されたものかは不明ではあるが、存在動詞-an から派生してきた不定人称主格接辞 *a(n) と対をなして他の人称の主格・対格範疇からの類推によって不定人称対格接辞 *i- が形成されたと考えられる。もしこの対格接辞が継承されたものとする、母音/i/が選ばれたのは主格接辞である中舌後母音/a/と対極をなす前舌高母音/i/は音声上最も聞こえの異なる母音であり、その音声上の違いをそのまま格の相違として認識させたものと考えられるからである。

傍証としてこのような格における対を対極的音素をもって形態的標示することはしばしばみられるもので、オセアニア諸語が典型例である。

3.2.2.3 2人称接辞

二人称単数/複数主格/対格接辞はどの方言形でも e- であり、中期アイヌ語でも e- (北海道方言ではヤニとなっているが、これは ani の形態素の a- にアクセントがあったために e- が半母音化したためであると考えられるから、本来は eani であったと思われる) なので、アイヌ祖語の再構形は *e- となる。しかし、この形態の前提は前述したようにアイヌ祖語以前に 2 人称接辞が存在したということになり、その前提は必ずしも正しいといえない。それは前節で述べたように不定人称が存在するようになった動機がアイヌ祖語以前の暗示的 1, 2 人称の概念にあり、2 人称にあったわけではないからである。

また前中期アイヌ語の二人称複数接辞の構成は *e- + *ti- であり、上述したように *ti- は「一人称複数」を表すことから、アイヌ祖語では二人称は数による区別が存在していなかった可能性が大きい。さらに石狩方言 (-es/es-) は eci- からの弱化発達形であると考えられ、その方言形を除いてすべて eci- である。その eci- 「あなた達」は e + ci と分析できると考えられ、e は「あなた(単数)」と ci 「私たち[複数]」を結合したものと見られるし、特に ci- は複数化標識と見ることができる。またもう一つには樺太方言には三人称の複数形に -hei (村崎 1979:50-1) があり、これは h + ci からなる(但し、村崎(1979)には h が本来何であったかについて

の言及はない)ので、eci- も同様に形態素の境界は e と ci の間にあると考えられる。従って、これらの分析結果を総合すると、アイヌ祖語の再構形は *e- と立てることができる。

3.2.2.4 3人称接辞

現代アイヌ語でも 3 人称接辞は存在せず、それ以前に何らかの形態を持っていたという痕跡も全くない。このような範疇自体が存在したとは考えられない。田村(1956:48)では現代語に 3 人称を立てず「いわゆる 3 人称を表す積極的な形式、人称代名詞も人称接辞もない」としていたが、その後田村(1964:44)ではその立場を覆し、「3 人称の人称接辞 ϕ (ゼロ) を認めることにした」としているが、竹内(1988:44-46)が言うように、前者が正しい判断であることが証明されている。詳しくは竹内(1988)を参照されたいが、その結果から言えることはアイヌ語の 1, 2 人称は「人称という正の成員」であるのに対して、3 人称は「本質的に消極的な負の概念」であり、ゼロ人称ではなく、その範疇自体が存在しないのである。

結論

それぞれの人称接辞の再構を行って来たが、その大枠としてアイヌ祖語以前からアイヌ祖語への特徴の変遷は比較方法理論により次のように考えられる：

アイヌ祖語以前においては以下のようにほとんどの文法範疇が欠如していたと見られる。存在したと見られるのは暗示的 1, 2 人称 *an/*an-/*i- と主格・対格の 2 範疇のみであり、1 人称と 2 人称が分離しておらず、コンテキストに応じて 1 人称か 2 人称かが決定された。単数と複数の範疇、自他動詞の範疇、数の範疇、除外と包括の 2 つの異なった範疇がない。

アイヌ祖語では以下のようにアイヌ祖語以前の欠如していた文法範疇が様々生じた。アイヌ祖語以前には 2 人称の主格と対格の範疇がなく、形態的区別は現在もないが、1 人称の主格・対格の異なる範疇もなかったが、1 人称と 2 人称の主格と対格の異なる範疇を獲得した。アイヌ祖語以前には 1+2 人称には無標である包括形のみがあったが、それが不定人称となり 1, 2 人称の区別が生じた後、1 人称には包括形と除外形の異なる形態が生じた。一人称複数主格の範疇において自動詞では *as、他動詞では *ti- という特殊な除外補充接辞がアイヌ祖語以降に生じた。アイヌ祖語以前には 1, 2 人称の

形態的範疇はなかったが、コンテキストによって人称を区別し、その後1, 2人称を区別する範疇が生じた。アイヌ祖語以前には1人称単数と複数の形態的区別がなかったが、単数に補充形として別の形態素が立った。アイヌ祖語以前には不定人称の範疇は存在しなかったものがその後独立した形態を持たない1, 2人称の形態素から単数と複数の範疇が生じたことで不定人称の範疇が生じた。

アイヌ雅語や口語の人称接辞の種類から見てわかるように、他動詞と自動詞の種類を問わず、また対格標示に付く接辞は人称の別なく基本的には接頭辞である。但し、一人称の自動詞/他動詞の区別を付けるために他動詞には本来の接辞である接頭辞を付け、自動詞には新規に接尾辞を付けるようにしたのではないかと考えられるが、これに関してはいまだに全く議論されていない(これは本稿の範囲ではないので別稿で扱う)。この動詞の種類による人称接辞の区別は極北諸言語のユカギール語やサモイェード諸言語(遠藤 1992:172-5)、またマイクロネシアのチャモロ語(Topping 1973:106-7)に他動詞と自動詞につく人称代名詞接辞のそれと類似している。例えば、ユカギール語ではそれぞれの人称に単数形と複数形が存在しアイヌ語と同様に主格接辞が自動詞と他動詞では異なり、さらに対格接辞とも異なる。サモイェード諸言語のネネツ語ではそれぞれの人称に単数形、双数形、複数形があり、自動詞と他動詞でそれぞれ接辞が異なる。チャモロ語では一人称のみに自動詞と他動詞につく接辞が異なり、それぞれ *hu* と *yo'* で、後者はスペイン語の一人称単数代名詞から借用

したものである。

また、動詞の種類により異なった主格の人称接辞がつくようになった変化はアイヌ祖語形成の一部を担って主として北方系言語との言語接触による影響やアイヌ祖語以前内における発達として生じたと考えられるが、それは一部次のように言語学的現象がアイヌ雅語に見られるためである。

ユカギール語、チュクチ語、コリヤーク語、ギリヤーク語の多くには細かな点については異なっているにしても、自動詞と他動詞の違いによって主格人称接辞が異なると共に主格と対格の違いによる人称接辞が異なる、また不定人称をもつというアイヌ雅語に見られるような異なった人称接辞が平行して見られる。このことはアイヌ語内での変遷のほか、地理的要因も支持して史的にいくつかの言語接触の波が押し寄せたことを暗示している。しかしながら、その言語接触ほどの人称にも同等に影響を与えたとは考えにくく、話者と最も関係の深い人称である一人称と不定人称に特に影響を与えたものと考えられる。この最後の点に関してはチャモロ語において二/三人称には全く影響がないにもかかわらず、一人称のみへの影響が見られるということも傍証となるかと思われる。

以上が結論であるが、この結論は暫定的なものであり、最終的なものではない。しかしながら、少なくともこのような傾向が既にアイヌ祖語に存在していたと判断され、それがアイヌ祖語、古代、中期アイヌ語を経て現代アイヌ方言に受け継がれていると言える。

参考文献

1. 浅井亨 1969 「アイヌ語の文法:アイヌ語石狩方言の文法の概略」、『アイヌ民族誌』 Vol. II、771-800、第一法規
2. 浅井亨 1982 「アイヌ語における数」、富山大学人文学部紀要、第5号
3. Austerlitz, Robert, 1985 Areal Phonetic Typology in Time:North and East Asia, Language Typology, Current Issues in Linguistic Theory 47:27-42
4. Austerlitz, Robert, 1994 Nivkhsko-ainsko-orokskii simbioz na ostrove Sakhalin, Ainskaia problema, Leningrad
5. Bachelor, John 1926 An Ainu-English-Japanese Dictionary, Tokyo
6. ybowski, Benedyct 1892 Słownik narzecza Ainow,

- zamieszkujących wyspe Szumszu wlancuch Kurylskim przy Kamczatce. Ignacy Radlinski (ed.) Rozprawy Akademii Umejetnosci, Wydzial Filologiczny, Serya II. Tom 1, Krakow
7. 遠藤史 1992 「北方諸言語における動詞の人称標示」、宮岡伯人(編)『北の言語:類型と歴史』、165-178 三省堂
8. 服部四郎 1956 『日本語の系統』、岩波書店
9. 服部四郎 1957 「アイヌ語における年長者層特殊語」、『民族学研究』第21巻第3号 pp. 33-45(158-165)
10. 服部四郎 & 知里真志保 1960 「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究」、『民族学研究』第24巻第4号 pp. 31-66(307-342)
11. 服部四郎 1961 「アクセント素、音節構造、喉音素」『音声の研究』第9巻、日本音声学会 pp. 6-23

12. 服部四郎 1962 「アイヌ語カラフト方言の「人称接辞」について」『言語研究』 pp. 1-20
13. 服部四郎 1964 『アイヌ語方言辞典』、岩波書店
14. 服部四郎 1967 「アイヌ語の音韻構造とアクセント」『音声の研究』 第 13 巻 日本音声学会 pp. 207-223
15. 板橋義三 1998 「アイヌ語の接辞 i/si と古代日本語の接辞、名詞 i/si の同源性について」、比較社会文化[九州大学比較社会文化研究科紀要] 第 4 巻 99-118
16. Itabashi, Yoshizo 1998, "Some Morphological Parallels between Ainu and Austronesian", *Mother Tongue*, issue IV, 40-95
17. 萱野茂 1996 『アイヌ語辞典』、三省堂
18. 金田一春彦 1966 「高さアクセントはアクセントにあらず」『言語研究』 No. 48
19. 金田一京助 1933 『言語研究』 河出書房
20. 金田一京助 & 知里真志保 1936 『アイヌ語法概説』、岩波書店
21. 金田一京助 1960 『アイヌ語研究』、三省堂
22. 金田一京助(編) 成田修一(撰) 1972 『松前の言』 アイヌ語資料叢書 国書刊行会
23. 金田一京助(編) 成田修一(撰) 1972 『藻汐草』 アイヌ語資料叢書 国書刊行会
24. 金田一京助(編) 成田修一(撰) 1972 『蝦夷品彙訳言』 アイヌ語資料叢書 国書刊行会
25. 金田一京助(編) 成田修一(撰) 1972 『蝦夷語彙』 アイヌ語資料叢書 国書刊行会
26. 金田一京助(編) 成田修一(撰) 1972 『蝦夷記』 アイヌ語資料叢書 国書刊行会
27. 切替英雄 1989 『アイヌ神謡集』辞典、北大言語学 研究報告 第 2 号、北海道大学文学部言語学研究室
28. 切替英雄 2002 「アイヌ語人称接辞の祖形」『日本語の系統論の現在』国際日本文化研究センター 国際共同研究発表 ハンドアウト 3月9日
29. Klaproth, Julius 1823 *Asia Polyglotta*, Paris
30. Krasheninnikov, M. 1755-6 *Opisanie zemli Kamchatki*, St. Petersburg
31. 村崎京子 1976 『カラフトアイヌ語』、国書刊行会
32. 村崎京子 1979 『カラフトアイヌ語:文法編』、国書刊行会
33. 村山七郎 1988 『北千島アイヌ語』、吉川弘文館
34. 村山七郎 1992 『アイヌ語の起源』、三一書房
35. 村山七郎 1993 『アイヌ語の研究』、三一書房
36. 村山七郎 1995 『日本語の比較研究』、三一書房
37. Naert, Pierre 1962 "Contacts lexicaux ainou-gillyak", in Refsing, Kirsten 1998, *Origins of the Ainu Language*, Vol.5 199-229, Richmend (England):Curzon Press
38. 中川裕 1995 『アイヌ語辞典:千歳方言』、草風館
39. 成田修一(編) 1977 『近世の蝦夷語彙』 私家版
40. Pilsudski, B. 1912 *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*, Krakow
41. Refsing, Kirsten 1987 *The Ainu Language: The Morphology and Syntax of the Shizunai Dialect*, Mouton
42. 佐藤知己 1991 「アイヌ語千歳方言における自称詞と対称詞について」『日本研究』 第 5 集 国際日本文化研究センター紀要 10月15日 角川書店
43. 佐藤知己 1995 「蝦夷言いろは引」の研究、北大言語学 研究報告 第 8 号、北海道大学文学部言語学研究室
44. Shibatani, Masayoshi 1990 *The Languages of Japan*, Cambridge University Press
45. 柴谷方良 1992 アイヌ語の抱合と語形成理論、宮岡 伯人(編) 北の言語:類型と歴史 203-222
46. Sternberg, Leo 1929, *The Ainu Problem*, in Refsing, Kirsten 1998, *Origins of the Ainu Language*, Vol. 1 755-799, Richmend(England):Curzon Press
47. Strahlenberg, P.J. von 1730 *Das Nord- und Ostliche Theil von Europa und Asia*, Stockholm
48. Street, John 1983 Review of 'The Genetic Relationship of the Ainu Language', *Journal of the Association of Teachers of Japanese*, Vol. 17 No. 2 192-204
49. 竹内和夫 1988 「第 3 人称について」『言語研究』 No. 94 pp. 25~49.
50. 田村すず子(福田すず子) 1956 「アイヌ語の動詞の構造」『言語研究』 No. 30
51. 田村すず子 1964 「アイヌ語沙流方言の名詞(その 1)」『早稲田大学語学教育研究所紀要』 No. 3
52. 田村すず子 1971「アイヌ語沙流方言の人称代名詞」『言語研究』 No. 59
53. 田村すず子 1988 アイヌ語、三省堂言語学大辞典、三省堂 pp. 6-94
54. 田村すず子 1996 『アイヌ語辞典:沙流方言』、草風館
55. 鳥居龍蔵 1903 『千島アイヌ』 吉川弘文館
56. Vovin, Alexander 1993, *A Reconstruction of Proto-Ainu*, New York:E. J. Brill
57. Voznesenski, Il'ia 1840 年代(1843 以前) *Kuril'skiie slova i proch*